

週間日記

上野
淳



午後一時過ぎの汽車で約一時間かから伝道地「豊富」の家庭集会に行く。私の伝道圏は内地（本州）での優に一県に当る宗谷支庁管内全域。一県を一教会で伝道、牧会することがどんなことか、稚内に来てまだ一年の私にも先だ充分分ってはいない。だが何としても宣教師がほしい。

よく暗れているので抜海原野から見る利尻富士が美しい。この夏もし方式特別伝道のために、利尻、礼文には渡れそうにない。来夏こそ旭川のカイテン宣教師や教会の青年達とテントをかついで渡ろうと思う。

豊富の集会から帰えると七時。室内佳子さんと池永静子さんが来ていて週報のガリ切りをし、印刷してしてくれる。

夕食して八時、二階の机に向う。十一時まで説教準備。妻子よく心をつかってくれる。

床に入ると何故か幌泉での求道者で友人の河原さんのことが思い出されてならない。彼は四十代の独身者。聾啞者。四季の移り目には、たのまないのに必ず来て、沢庵を漬けたら、薪を割ったり、雪かきをしてくれた。思い出にひたっていると「先生、幌泉のこと思い出すのは無理ないです。しかし、三年経つ

土曜日

園児礼拝。創世記三十七章八ヨセフ物語の連続説教三回目。野に彷徨っているヨセフに人が問う「あなたは何を捜しているのですか」。ヨセフが「兄弟たちを捜しているのです」と答えるところは、何度読み、何度話しても新たな感動を感じる。主イエス・キリストがヨセフにあつて語っておられるからである。この物語を私が始めて耳にしたのは十才のとき。結核で将に死なんとするクリスチャ

ンの姉婿から。あのとき、始めて私に福音の種がまかれたのだ。その種は、私が豊橋陸軍予備士官学校から復員するまでの十年間深く地中にあつたけれども……。前任地の幌泉にいたとき、雨にぬれながらながしてゆく金魚屋さん呼び止め、強引に一宿一飯を差し上げたことがあつた。彼に私を見る思いがして。……売れない金魚、売れない福音。だが、あのときの私の間違いは、福音を売ろうとして、兄弟を捜さないところにあつた。

たら稚内のこと夢にまで見て下さい」と、昨秋私に言った大野書記役員の言葉が甦える。

日曜日

四時に目覚しが鳴る。床の中で二時間、今日のテキスト・ヨハネによる福音書十一章「ラザロの甦えり」を信じ、感じ、考える。

六時、起床して洗面、机に向い、祈りながら説教を書きあげる。「主よ、もう臭くなっております。四日もたっていますから」と言ったときの、死んだラザロの姉妹マルタの非難と高ぶりと絶望と。イエスの来たり給うことの遅さへの非難、主よりも自分の方がもつとラザロを愛しているという高ぶり、死の前での絶望。マルタである教会にへみ言葉は今日も語られる。「石を取りのけなさい」。

「もし信じるなら神の栄光を見るであらうと、あなたに言ったではないか」。

今日は、市内バスがスト。それに豪雨。教会学校の生徒も、大人の礼拝者も、ズボン、スカートをびしょぬれにして集まる。

朝拝出席者は十五人。いつもの半分。然しこの十五人は、うなぎの寝床のような南北八軒の各地から豪雨の中をあつまつた人々。

礼拝の後での、交わりの時間の証しは中学校教諭の三浦和子さん。昨秋まで教会付属幼稚園の主任として創業時代（三十六年秋、開園、現在園児百二名）の文字通り基礎づくりをしてくれた人。

私は十二時五十分の汽車で「中頓別」の家庭集会に行くので申す。

稚内からは二時間半。歯科医の伊藤先生のマンドリン伴奏で礼拝。祈りの中で、この一握りの群の中から内臓手術のために旭川へ行っている阿部幸子さん（昨年クリスマスに授洗）を、来週、札幌での教区伝道企画会議に出席しての帰途見舞うように、と導かれる。洋裁研究所、真坂百合さんの二階で泊めていただく。

火曜日

六時五十分の汽車で帰途につく。いつもなら、もう一泊して「浜頓別」「枝幸」を訪問、集会するのだが、今日はチャブレンとの約束があるので断念。

車中、小松川事件の加害者、李珍宇と朴寿南の往復書翰「罪と死と愛と」（三一書房）を読む。信仰によって実存者にならうとする

李珍宇と自覚的、主体的朝鮮人として社会の矛盾と戦う朴寿南の姿は、どちらも私への痛捧。

「声問」で途中下車して、ファンダメンタリストの独立宣教師H氏を訪問。彼は、ヨハネの第二の手紙十節「この教を持たずにあなたがたのところに来る者があれば、その人を家に入れることも、あいさつすることもしてはいけない」、を示し、「あなたがファンダメンタリストになるまではもう来ないでくれ」と言う。玄関で握手をもとめると、彼は一瞬ためらったがそれでも意を決して手を与えてくれる。

夜、「キャンプ・ワッカナイ」の従軍牧師ローニー少佐と一週間前ミシガン州から来たばかりの秘書ケネス・チャンス君が遊びにくる。楽しい家庭的なひととき。

玄関で、チャブレンとチャンス君に握手した後、教会の廻りの引揚者や貧困な人々を思う。クリスマスであること、牧師であること、日本人であること、人間であること、の統一の苦しみの中で、「主よ、……」と祈る。

水曜日

朝はフランクフルト著作全集の中から「時代精神の病理学」を読み、午後、教員を訪問する。このイースターに授洗した鹿野美代さんなど。この一年に六人の人々が信仰を告白して授洗した。幌泉では八年間に六人。

夜は七時半から聖書研究と祈り会。教会役員で保健所次長の武田さんの司会。

この間、真青な顔で文字通りとび込んで来た(午前中教会を探がし廻って)青年K君も出席している。畑中先生も。

畑中先生は初代牧師で(私は三代)、今は盲聾学校教諭の独身上品なおばあさん。

先生は、どんな集会でも、教会でも常に私の欠けたところを補っていて下さる。神の配済を感謝。

木曜日

八時の汽車で「名寄」へ行く。急行で三時間。原生林、白樺、ヨルダン渓流を思わせる天塩川、放牧されている牛馬。十二年前、夏期伝道神学生であった私を魅了した「緑、緑、緑」は今も変わらない。

十一時より道北センターで、第一回道北信徒大会の準備委員会。稚内地区、名寄地区、

旭川地区よりなる道北伝道圏(六教会、五伝道所、七牧師、二宣教師)の委員長としての責任は重い。

帰途、車中、トウルナイゼンの「牧会学」三回目精読。

九時過ぎ着。宏子から、今日一日の教会、幼稚園、家庭、地域社会での出来ごとの報告を聞く。次女へみぎわの食前の祈りを宏子再現する。「カミチャマ、オツユモ、ポツポモアリガトオ。オトオチャャンロマモツテクダシャイ。キョートノオバアチャンロマモツテクダシャイ……」。

金曜日

朝から遠隔の地にいる教会員に週報を送。汽車で三時間の「遠別」から一ヵ月か二ヵ月に一回来る姉妹には、祈りを込めた教会書書を内封する。

昼、市長夫人で教会婦人会長の浜森千代さんに電話で事務連絡。

午後は、みぎわを自転車にのせ、幼稚園の運動会用具の注文に行く。帰途、小学校二年の長女いずみの運動会(次の日曜)に、私も宏子も行ってやれないことをすまないな、と

思う。この気持を何か物で表現せず、いずみにも、苦難と栄光の主にあずからせる話しあいへの糸口にしようと思う。

夜は青年会例会。テキストはイザヤ書六章。青年会長で幼稚園助教諭の須藤直恵さんは、毎水曜日の祈り会には必ず葉書二枚を持参して、皆に寄せ書きをさせる人。教会間の連帯も、他住会員への配慮も、こうした地味な奉仕に支えられている。

今夜、例会に来られなかった青年会員のために祈ってねる。カラフトの見えるすずらん丘や島への連絡船、ソ連のタグ・ボート、北洋船の並ぶ港を、おそらく見ることはない京都にある老いた母二人のためにも。

(稚内教会牧師)

本誌購読受付中

本誌は学校と卒業生の活動状況を伝える同志社の機関誌です。

購読料 一年分六百元(送料とも)

京都市上京区烏丸今出川

同志社本部内

同志社時報